

2022 年度 創価大学法科大学院

B 日程 小論文審査

問題 1 (配点 50 点)

以下の文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

「ベーシックインカムを考える」

ベーシックインカムをめぐる議論が世界的に活発化しています。スイスでは昨年 6 月、導入すべきかどうかをめぐって国民投票が実施されました。結果は反対多数で否決されましたが、それでも投票者の 23%が賛成票を投じ、国外からも大きく注目されました。

ベーシックインカムという言葉は初めて聞く人もいるかもしれません。そのまま訳せば「基本所得」という意味になります。この「基本所得」を国民のすべての人に保障しよう、というのがベーシックインカムの考えです。

国民投票が実施されたスイスでは、賛成派が「大人には毎月 2500 スイスフラン(約 28 万円)を給付し、子どもには毎月 625 スイスフラン(約 7 万円)を給付する」案を提唱しました。要するに、基本的な生活を成り立たせるためのお金を政府が全国民に給付するという社会保障のアイデアのことです。

ポイントは「国民すべてに給付」という点です。現金の給付はこれまでの社会保障でも実施されてきましたが、それらはすべて限定された人たちに対する給付でした。

たとえば生活保護では、「何らかの理由で働けない」「資産がない」「援助してくれる身内がない」「年金や児童手当による収入があっても、最低生活費の基準額を下回っている」といった条件をクリアした人に対してのみ、現金(生活保護費)が支給されます。同じように児童手当では、子どもの年齢や出生順(第 3 子以降は増額)によって支給額が異なったり、所得制限があったりしますし、そもそも 15 歳以下の子どものいない世帯には支給されません。

これに対して、ベーシックインカムではそういった条件を一切設けません。子どもがいようがいまいが、現役世代でバリバリ働いていて十分な収入があろうが、あるいは企業の経営者で億単位の収入があろうが、すべての人に一律に基本所得を給付します。この「無条件に、誰にでも」というのが、これまでの社会保障とは異なるベーシックインカムの一番の特徴です。

ベーシックインカムには常に財源についての疑問が付きまといまいます。それもそのはずで、すべての人に無条件に、基本的な生活を営むためのお金を一律に支給しよう、という社

会政策の構想がベーシックインカムです。どこからその財源をもってくるのか、という疑問が出されるのは当然でしょう。この疑問は確かに素朴なものですが、それだけにとっても強力です。

たとえば、すべての日本国民1人当たり毎月15万円を支給すると仮定しましょう。その場合、15万円×12カ月×1億2000万人で、総額216兆円もの財源が毎年必要となります。

これだけの財源を今の日本政府が確保するのはほぼ不可能です。日本の2016年度の社会保障給付費は予算ベースで118.3兆円でした。これは年金や医療、介護、福祉など社会保障分野で支出されるお金の総額です。つまり、これらの支出をすべてなくして、全額をベーシックインカムに回しても、毎月15万円を支給するにはまったく足りないということです。

では、16年度の社会保障給付費118.3兆円をすべてベーシックインカムに回すとしたら、いくら受け取ることができるでしょうか。国民1人当たり毎月8万円強が支給されることとなります。生活水準にもよりますが、これでは基本的な生活を成り立たせるための金額とはなかなかいえないでしょう。

ベーシックインカムを推進する論者の中には、年金や生活保護などあらゆる社会保障の給付をベーシックインカムに一本化すれば、資力調査などの行政コストを節約できるため、その分をベーシックインカムの給付に充てることができる、と主張する人もいます。確かにすべての人に一律に同額を給付するのであれば、生活保護受給者に対する相談員(いわゆるケースワーカー)などの人件費も節約できるかもしれません。

しかし、その場合に節約できるのは、かなり多めに見積もっても2兆円程度です。1人当たりの給付額に換算すると、毎月1400円ほどにしかなりません。ベーシックインカムはどうしても財源の問題で実現可能性の壁に突き当たってしまうのです。

ベーシックインカムはすべての国民に一律に、生活のための基本所得を給付しようとするため、常に財源の問題にぶつかってしまいます。しかし、たとえ財源の問題をクリアできたとしても、本当に効果的な財政支出の方法なのかという疑問がつきまといまいます。

日本の社会保障給付費は2016年度予算ベースで118.3兆円です。これをすべてベーシックインカムに回すと、国民1人当たり毎月8万円強のお金が支給されることとなります。

ただし、これは年金や医療、福祉などすべての社会保障給付費をベーシックインカムの財源に回した場合です。その場合、医療費は全額自己負担になります。大きな病気やけがをしたらすれば、毎月8万円強の給付は一気に吹っ飛んでしまうでしょう。

そうすると、医療保険制度はそのままにして、つまり医療費を除いた社会保障給付費をベーシックインカムに充てる方がいい、となるかもしれません。16年度の社会保障給付費のうち医療費の37.9兆円を差し引くと、残るのは80.4兆円です。これをベーシックインカムに回すとすれば、国民1人当たり毎月約5万6000円を受け取ることとなります。

この金額がベーシックインカムとして十分かどうかは意見が分かれるでしょう。少なくともここから言えるのは、すべての人に一律にお金を給付するというやり方は、社会保障の

実施手法としては非常に効率が悪いということです。一律の現金給付では、医療が本当に必要な人に十分な医療を届けることができません。多くの人から徴収した保険料や税金を、医療を必要とする人に集中投下するからこそ、社会保障は効力を発揮するのです。

同じことは子育てや介護、さらには貧困対策など、他の社会保障の領域についてもいえます。一律の現金給付は一見シンプルで効率的なやり方のように見えます。しかし、子育て支援なら子育てを必要としている人に、貧困対策なら貧困層に、集中的にお金を投入した方が問題を解決するためにはよほど効果的です。これはベーシックインカムが抱える根本的な弱点といえるでしょう。

ベーシックインカムの最大の特徴は「無条件性」という点にあります。基本的な生活を成り立たせるために必要なお金(基本所得)を、すべての人に無条件に給付するという点に最大の特徴があるのです。

生活保護のように、資産もなく、援助してくれる身内もおらず、働けない人だけを対象とするものではありません。莫大な資産があったり、働いていて十分な所得がある人に対しても、一律に同額の現金を給付するのがベーシックインカムです。この無条件性という点で、これまでの社会保障と明確に区別されるのです。

したがって、ベーシックインカムに対して出される最大の疑問も、この無条件性についてのもとなります。すなわち、高い給与をもらっていたり、多くの資産を保有している人にまで、なぜ所得保障として同額の現金を支給する必要があるのか、という疑問です。確かに、貧困対策のためならすべての人への給付は必要ありません。

こうした疑問に対して、ベーシックインカムの推進派はこう主張します。ベーシックインカムは貧困対策のためだけでなく、人々を労働から解放し、人間の尊厳を回復するためのものでもある、と。

どういうことでしょうか。ベーシックインカムによって、基本的な生活を送るためのお金をすべての人が給付されることにより、人々は働きたくなければ働かなくてすむようになります。たとえどんなに嫌な、つらい仕事でも、生きていくためには働かなくてはならない、という状態から脱することができるということです。これが「労働からの解放」です。そしてその結果、人々は自分や社会にとって本当に意味があると思える仕事だけができるようになります。これが「尊厳の回復」ということです。

この「労働からの解放による尊厳の回復」こそが、ベーシックインカムが目指す最も重要な理念です。ベーシックインカムは、単なる貧困対策を超えた、大きな社会変革の試みでもあるのです。そうである以上、ベーシックインカムをめぐる是非の判断は、この点を踏まえて見極められる必要があります。

ベーシックインカムが目指すのは「労働からの解放」です。貧困対策が目的ならば、働いて高所得を得ている人やまとまった資産を保有する人に基本所得を給付する必要はありません。

せん。ベーシックインカムは富裕層を含むあらゆる人に一律にそれを給付することで、人々が「働きたくなければ働かなくてすむ」ことを可能にします。「生きるためにはどんなにつらい仕事でもしなくてはならない」という「労働への従属」から人々を解放放つわけです。

問題は、こうした「労働からの解放」は、ベーシックインカムの推進派がいうように本当に望ましいものなのか、ということです。

ベーシックインカムの推進派は、人々が「働きたくなければ働かなくてすむ」ようになることで、過労によるうつや自殺から逃れられると主張します。また、それによっていわゆるブラック企業も淘汰されていくと主張します。確かに、ベーシックインカムによって最低限生きていけるだけのお金が支給されれば、いつでも仕事をやめることができるため、仕事によって精神や身体が追い込まれることは少なくなるでしょう。

しかし、過労によるうつや自殺、ブラック企業などの問題は、ベーシックインカムが導入されようがされまいが、なくしていくべき問題です。ベーシックインカムを導入しなければそれらの問題を解決できないような社会は、そもそもベーシックインカムの導入以前に改革が必要です。

推進派はほかにも、人々が「働きたくなければ働かなくてすむ」ことで、自分や社会にとって本当に有意義だと思えることに自分の時間を使えるようになると主張します。確かにそれは個人レベルで見れば望ましいことかもしれません。

しかし、人々の勤労意欲をそれで維持できるのかは完全に未知数です。社会の維持のためには最低限必要な労働があります。ベーシックインカム推進派は、社会に本当に必要な労働ならば、人々はボランティアや地域貢献などを通じて行うはずだと主張します。果たして本当にそうなのか、そうした想定は人々の善意の自発性を過度に評価しているのではないか、という疑問が残ります。

(出典:萱野稔人「ベーシックインカムを考える」(1)～(5)『日本経済新聞』2017年7月5日、7月6日、7月7日、7月10日、7月11日、朝刊より抜粋・一部改変)

【設問 1】 (配点 10 点)

ベーシックインカムの意味と目的を 120 字以内で述べなさい。

【設問 2】 (配点 40 点)

日本にベーシックインカムを導入すべきかについて、本文中で指摘されているベーシックインカムのプラス面とマイナス面を考慮して、400 字以内で述べなさい。

以上

2022 年度 創価大学法科大学院

B 日程 小論文審査

問題 2 (配点 50 点)

以下の設問に答えなさい。

【設問】

大学生の A 男さん、B 子さんが、日本の伝統技術の承継・存続について話をしている。以下の会話に出てくる情報をもとに、日本における伝統技術の承継・存続をどのようにして促進すべきかについて、促進する必要はないとする考えを批判しながら、促進すべきとする根拠および具体的方法を説得的に 400 字以上 500 字以内で記述しなさい。

A 男：以前に、うちのお父さんが鍛冶職人やってるって話はしたよね？

B 子：うん、聞いたよ。

A 男：実はさ、もうだいぶ年がたって、体もガタがきたから、そろそろ廃業しようかなって言われたんだよ。それで自分が跡を継いだほうがいいかな、なんてことも思ったりして、ちょっと迷っているんだよね。

B 子：お弟子さんとかいないの？

A 男：今はいないね。昔は何人かいて、長いことお父さんの元で修行して、やっとなん前になって独立したんだけど、やっぱ食べていけないって言って、転職したんだってさ。いまはサラリーマンやってるらしいよ。

B 子：そっか、食べていくのは大変なんだね。お父さんが廃業したら困るお客さんはたくさんいるんじゃないの？お父さんの作った刃物で長年仕事してきた人なんかは、その刃物じゃないと仕事できないとか・・・

A 男：そうだね。昔からお父さんの作ったハサミで仕事をしている美容師さんとか、カッティングを得意とする料理人の人とか、木彫りの職人さんとか、けっこうたくさんいると思う。包丁や彫刻に使うノミとかね。特に飴細工の職人さんなんかは、特殊なハサミらしくて、お父さんの作ったものじゃないとできないみたいなんだ。

B 子：それは大変だね。でも今は安くて品質もそこそこ良い大量生産のハサミがどこにでも売っているから、需要が少なくなっているのも確かだよな。仮に A くんが跡を継いでもその仕事で食べていけるのかな。

A 男：どうだろうね。そこは何とも言えないような・・・足元を見られて安く買い付けられたりすることもあるとは聞いている。一朝一夕で身につくような技術では

なく、長年の修行や経験によって培ってきた技術なんだけど、そうしたことは正当に評価されていないような気はするな。需要と供給のバランスだから、衰退していくのは仕方ないことなのかも・・・

B子：そうした貴重な技術だということは、これから上手に発信していかなければいけないんじゃないかな。日本だけじゃなくて、海外ではこうした高い技術が評価されるんじゃないの？海外ではお父さんの作るようなハサミを手に入れたという人はまだまだたくさんいるんじゃない？

A男：あー、なるほどね。そういうことはまだ考えてなかったな。インターネット時代だから、何かできそうな気はするけど、具体的にはどうすればいいんだろうなー。

B子：それはあなたが考えることでしょ。私でも日本のアニメやゲームとコラボするとか考えつくわよ。それからあなたが跡を継ぐといっても、すぐには決められないんじゃないの？就職活動だってやっているんでしょ。一旦は社会に出て、いろんな世界を見てから、跡を継ぐかを決めてもいいんじゃないの？

A男：確かにそうだな。自分個人の問題でいえば、小さい時からお父さんの背中しか見ていなかったから、正直違う世界も見てみたいよ。職人の世界も厳しいから、中途半端な気持ちじゃ長続きしないだろうし、覚悟を決める期間というか、そんな時間が欲しいかな。違う分野で仕事をした経験は、後々生きてくると思う。

B子：そうだね。後継者問題は、伝統技術の分野全体の問題だね。今の若者は何やっても長続きしないとか、すぐ言われちゃうからさ。個人の資質の問題じゃなくて、伝統技術を扱う業界のシステムの問題のように思うよ。

A男：その考え方には同感だな。日本も終身雇用制はとっくに壊れているし、手に職つけたいという若者はいると思う。

B子：そもそも、長期間の修行や高度な技術が必要なのは、伝統技術の世界に限らないだろうしね。弁護士だって、なりたてはややはやで、テレビドラマみたいに被告人を無罪にすることは難しいだろうし。フリー医師、大門未知子先生も、ブラックジャックも、新人のころは、失敗したこともあったんじゃないの（笑）

A男：弁護士や医者には後継者不足なんてあまり聞かないなー。なんでだろう？

B子：弁護士や医者とは違って、伝統技術の世界は一人前になるまでが長いし、その間の収入保障がないからなんじゃないの。いくら興味があっても、生きていけないじゃチャレンジしないよね。その点は改革しないと。

A男：そうだね。そもそも需要がなくなってしまったという問題は、どう考えたらいいんだろう。これは難しいなー。需要がないなら、そういう技術はなくなっても仕方ないんじゃないかという意見はあると思うんだけど、これにはどう反論すればいいんだろうか。多くの人が伝統技術を残すために、たくさんの時間と労力をかけようとしているんだから、伝統技術を残していく必要性があるん

だということを説得力を持って語れるようになっておきたいと思うよ。

B子：そうだね。時代が進んでいけば、あなたのお父さんが作るハサミと全く同じものを3Dプリンタとかで再現できるようになるかもしれないけど、コロナで全く違う時代が来たように、これからどう変わっていくかも、予想がつかないよね。

A男：地球上の生き物の進化も、多様性があったから今まで残ってきた種がいるんだよな。伝統技術で言えば、生産性とか効率性とかと対極にある価値概念が大事なことかな。

B子：考えることがたくさんあるわね。私にとっても良い機会だからもう少し考えてみる。

以上